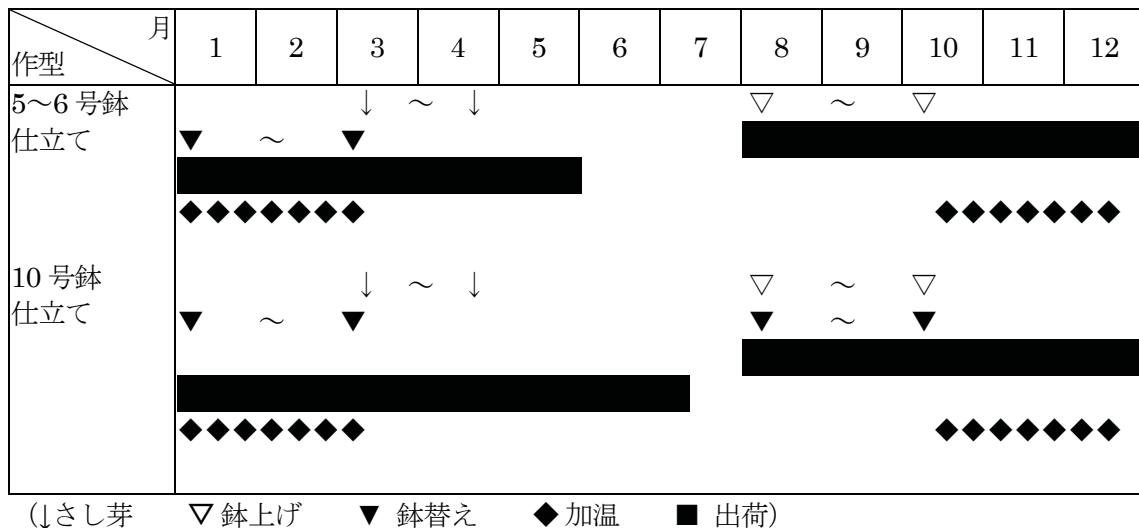


## 11-2 ゴールドクレスト(中・大鉢)

*Cupressus macrocarpa* ヒノキ科イトスギ属

### 栽培上の留意点

- 1) さし木育苗時、発根まで期間が長く乾燥を嫌うので注意する。
- 2) 育苗時、肥やけや水不足に注意する。また、移植時に根が折れやすいので刺激を与えないよう注意する。



### 品種 モントレイ, サイプレス, ウィルマ さし木

11月頃にさし木する穂を採取する。当年枝の木化しかけたものを用い、10cm程度に調整、水上げし、発根を促進させる。6~8月のさし木は避けたほうがよい。培養土は、鹿沼土（赤玉土）6:ピートモス2:バーミキュライト2の混合したもので、軽い培養土が良い。植え付け時は十分にかん水する。

### 鉢上げ

さし木後、1~1か月半くらいで発根するので3号~3.5号鉢に鉢上げする。培養土は、赤玉土を主体に牛糞堆肥、腐葉土、ピートモス等の有機物を混ぜたものを用いる。4か月経過したら、5~6号鉢に鉢替えし、10号鉢に上げる場合は、5~6号鉢で6か月経過したら鉢替えし、10号鉢で1年経過後出荷する。

### 施肥

さし木育苗時は、カルス形成後液肥を葉面散布する。3~3.5号鉢には、緩効性肥料（10-10-10）を鉢当たり5粒位施す。株の状態を見ながら40日程度を目安として施す。5~6号鉢、10号鉢には同じ緩効性肥料を生育に合わせて施す。

### かん水

生育が旺盛になれば乾かさないようにかん水する。

### 温度管理

冬期施設内では、夜温10~15°C、日中20~25°Cを保持する。

### 病害虫

ハマキムシ類、ヨトウムシ類

### 調製・出荷

ライトグリーンの葉色が売り物であるが、光線不足は軟弱徒長するので、光を十分に当てることが大切である。仕立ては自然樹形が一般であるが、スタンド仕立て等の造形ものも多くなっている。

## 12 ゴムノキ(インドゴムノキ)

*Ficus elastica* クワ科イチジク属

### 栽培上の留意点

- 1) さし木育苗では上葉ほど大きくなりバランスが悪いので、取り木が望ましい。
- 2) 高温多湿を好むが、多湿では草姿が締まらないので、光線を当て換気を行うようにする。
- 3) 高温乾燥で落葉するので管理に注意する。



月 作型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
5号鉢仕立て	▲—▽			■			▲—▽	■		▲—▽	■	

(▲取り木 ▽鉢上げ ◇保温 ◆加温 ■出荷)

**品種** F.ロブスター (インドゴムノキの変異種デコーラより育成)

### 親株管理

充実した良い親株の養成がポイントとなる。施設内の光が十分当たる場所を選び、堆肥を入れ深耕した床に、取り木作業がやりやすいように植え込む。堆肥は油かす、鶏ふん等を2か月間隔で施し、地表の湿り具合を見て散水を行う。

### 取り木

取り木する部分の葉を2枚落とし、茎径の3分の2くらいまで下から上にナイフで切り込みを深く入れる。切り口に湿らせた水ごけを入れたうえで、まわりを水ごけでくるみ、その上にビニールを巻いて止める。取り木をする枝の葉は5枚をつける。15°C以上ないと葉の伸びが悪く、取り木の効率が落ちる。20°C、2~3週間で発根開始するので乾燥に注意する。苗を購入する場合もある。

### 鉢上げ

まわりの水ごけから根が見えてきたら親木から切り離し、ビニールをはずし、水ごけを少しあって、5号鉢に鉢上げする。取り木から鉢上げまでは夏で30日、冬で40日程度である。培養土は田土6、堆肥4の割合とする。鉢上げ後には蒸散により葉が垂れやすくなるので、2週間程度は寒冷紗等で遮光を行い、活着まではあまり風を通さないようにし、活着した後には通風を良くする。

### 施肥

培養土1リットル当たり緩効性粒状化成(10-10-10)を2g、追肥として粒状化成を5~7g/鉢施す。

### かん水

取り木中は水ごけの部分が適度に湿るように上からかん水する。水ごけが過湿になると根の生育が悪くなる。鉢上げ後は鉢土の表面が乾いたら散水するようにし、過湿にならないように換気する。

### 温度管理

夜温は最低13°C以上、できれば15°C以上を確保する。昼温は30°C以上ならないよう換気する。

### かん水

十分なかん水が必要であり、生育が旺盛になれば乾かさないようにかん水する。雨が葉に溜まると、病気が発生しやすい。

### 病害虫

ハダニ類、アブラムシ類

### 調製・出荷

葉が10枚程度展開すれば出荷可能。

## 13-1 シクラメン *Cyclamen persicum* サクラソウ科シクラメン属



### 栽培上の留意点

- 1) 栽培期間が長いので、播種から鉢上げまでの初期生育にむらを生じないように管理する。
- 2) 主芽、側芽、新芽の動きをよく観察し、生育を停滞させないようにする

作型\月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
6号鉢										..-..		
	○		○		○							
	3号		4~4.5号		6号							

(..:は種 ○鉢上げ ◎鉢替え ◆加温 ◇保温 ★遮光 ■出荷)

### 品 種

- パステル系 (バニー, ピアス, プルマージュ, シューベルト, ランジェリー, リップスなど)
- 在来系 (バーバーク, ビクトリア, ピュアホワイトなど)
- F<sub>1</sub> (ハリオス, ロブスター, シエラ, コンサートなど)
- 栄養系 (ヴェスター, ピエーノ, パープルビクトリアなど)

### 播種準備

培養土は市販の調整ピートなどを使用する。田土または赤土と腐葉土を半々に混合し、くん炭や牛糞たい肥などを少量混ぜて1年以上堆積したものを使用しても良い。自家製培養土を使う場合は消毒をする。播種前に培養土に十分かん水しておく。種子は消毒後、一晩水に浸漬する。

### 播 種

5号鉢仕上げでは12月、6号鉢仕上げでは10月下旬～11月上旬に播種する。200～288穴セルトレイまたは播種箱に播種する。播種後は種子が隠れる程度に覆土をする。発芽適温は18～20°Cで、地温が低いほど発芽が不揃いになる。

### 播種後の管理

播種後は培養土が乾かないようにシルバーポリなどで覆って暗黒条件とし、温室内の暖かい場所（暖房機の近くは温度が上がりすぎるため、暖房機から離れたところがよい）に置いて適温を確保する。培養土が湿っているかを週1回は確認する。播種後3～4週間くらいで発芽するので発芽後は注意して観察し、50%くらい発芽したら覆っていたシルバーポリなどを取り除く。急激な環境変化は苗の生育に良くないので、寒冷紗などで覆って2～3週間遮光をして徐々に光に慣らす。また、ビニル等でおおいをして高湿度を保ち（昼間は高温にならないようすかす），種皮が自然にとれるように管理する。本葉が伸び始めたら徐々に通風を図り、被覆を取り除く。夜温は最低16～18°Cを目標に管理する。

### 施 肥

発芽揃い後、窒素濃度30～50ppmの液肥を適宜追肥する。

### 鉢上げ

2月下旬頃、本葉3枚前後になったら鉢上げをする（鉢上げの代わりに移植を行っても良

い)。その際、子葉の展開が不良なものや変形しているもの、生育の著しく不良な株は除く。培養土は市販培養土または自家培養土を用いる。自家培養土は田土または赤土 5 : 腐葉土 4 : 牛糞たい肥 0.5 : もみ殻くん炭 0.5 を参考にする。pH は 5.5~6.5, E C は 0.5dS/m 以下を目安とし、りん酸の不足がないように (80mg/乾土 100g 以上を目標とする) チェックする。特に、赤土を使用するよりん酸不足になりやすいので 1 年以上堆積し、りん酸肥料を施用する。緩効性肥料を培養土 1 リットル当たり 1g 程度施用する。

培養土は強く握って崩れない程度に水分を含ませ、鉢上げ後は株を落ち着かせる程度の軽めのかん水にとどめて過湿を防ぎ、気温は最低 18°C 程度を確保して活着を促進する。活着後は徐々に気温を下げる。鉢上げ後 3~4 週間経ったら窒素濃度 30~50ppm 程度の液肥を 7~10 日程度の間隔で施用する。

この時期に生育停滞を起こすとその後の生育に大きく影響するので、培養土の肥料分や過湿、温度管理には十分な注意を払う。

### 鉢替え

4 月下旬頃、本葉 14~15 枚になったら 4~4.5 号鉢に鉢替えする。鉢替え培養土は鉢上げに準ずる。基肥に緩効性肥料を 1~2g 施用する。塊茎が半分くらい見える程度の浅植にする。ここでも生育不良のものは捨てる。鉢替え直後のかん水管理は鉢上げに準ずる。

活着後は苗の状態や天候などを考慮して、過湿に注意しながら十分かん水する。鉢替え後 3 週間程度経過したら窒素濃度 50ppm 程度の液肥を施用し、必要に応じて固形肥料を置き肥する。

### 夏越し

光合成特性からみたシクラメンの生育適温は 15~20°C である。25°C 以上になると光合成速度は急激に低下し、呼吸量が増加してエネルギーの消耗が大きくなる。シクラメンの個体光合成速度は 5~6 万ルクスで平衡に達するので、これ以上の光量は気温上昇や葉焼けなどをもたらすため好ましくない。そのため、最高気温が 25°C 以上になる 5 月下旬から 9 月下旬までは、晴天時の日中に 60% 程度の遮光を行う。また、天窓や側窓を開放し鉢間隔を十分とて通風を図り、高温時には葉水をあたえて温度を下げるなどして生育を促す。

高温、強光下に水不足でしおれさせると生理活性が著しく低下し、黄化葉の発生など株の傷みが大きくなるのでかん水不足にならないよう十分注意する。特に晴天日の日中にしおれさせることは絶対に避ける。株の傷みは生育を遅らせ、十分な葉数や花数の確保が困難になり、奇形花発生の原因にもなる。

施肥は窒素濃度 50ppm 程度を基準にし、必要に応じて固形肥料を施用する。5~6 月に花が進んでどんどん開花していくと、1 次側芽数が少なくなつて開花時の葉数確保が困難になる。このような場合は蕾を抜いて施肥レベルを少し上げ、側芽の発達を促す。定植後の施肥は、8 月下旬までは液肥を中心に行い、それ以降は固形肥料の施用を適宜行う。夏季は外観の生育は緩慢に見えるが、葉芽の分化が最も旺盛な時期であり、施肥は継続して行う。

### 定植

7 月中~8 月上旬頃、葉数 50~60 枚のものを 6 号鉢に定植する。定植に用いる培養土は鉢上げ時の培養土よりも赤土や田土の割合を少し増やし、腐葉の割合を減らしてやや重めの土にする。鉢替え時と同様に基肥に緩効性肥料を 1~2g 施用する。高温時の作業となるので日よけを行い、植え替え後にしおれさせることのないよう注意を払う。施肥、かん水は夏越しの項に準じる。

### 葉組み

草姿バランスを整えるため、8 月以降出荷まで 4~5 回程度葉組みを行う。古い葉や徒長した葉を下方にもつていいき、中心の葉を外側にもつていくことによって株の中心部分に光を当てるようとする。葉組みは株の中心から花蕾を出す、葉の徒長を抑制する、葉の受光体勢を整えて生育を向上させる等の効果がある。葉組みリングを使用すると葉組み回数を減らすことができ、省力効果がある。

## 開花促進

出荷期に十分な花数を確保するためには、施肥や温度管理等によって順調な花芽の分化、発達をさせる必要がある。花柄長2cmの花芽が開花するまでの日数は70~80日と考えられるところから、11月下旬に出荷するには9月上旬~中旬に2cm程度の花芽が十分確保されている必要がある。花芽の発達が遅れている場合は施肥をやや控え、必要に応じてジベレリンを処理するが、ジベレリン処理された株は消費者の手に渡ってからの黄化葉の増加や後半の開花数の減少などを引き起こす懸念があるため、どうしても開花が間に合わない場合の最終手段とする。花芽が進みすぎている場合は夜温を下げるなどして調節する。

## 施肥・温度管理

施肥は生育状況を見ながら液肥を中心に追肥で行う。液肥の窒素濃度は50~100ppmを目安とし、固形肥料を適宜施用する。

最低気温が10°C以下になる10月中~下旬から保温を行い、11月上旬以降は夜温15~16°Cを目標に加温する。開花が遅れ気味の時は17~18°C程度に加温し、日中は十分に換気する。葉数が不足している場合は18°C以上を確保して葉組みを行い、施肥レベルを上げる。

## 病害虫

細菌病：芽腐細菌病 軟腐病 葉腐細菌病

糸状菌病：ピシウム根腐病 斑葉病 斑点病 灰色かび病 苗腐病 姫凋病 苗立枯病  
根腐病 炭疽病

害虫：アブラムシ類 ハダニ類 アザミウマ類

## 調製・出荷

6号鉢では、最低10輪以上開花した鉢を出荷する。出荷期間は11月下旬~12月中旬が主体である。出荷に際しては傷んだ葉や花を取り除き、病気がないことを確認する。

ひも給水（6号鉢）およびエブアンドフロー（5号鉢）生産における肥培管理例

月 作型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ひも給水6号 鉢											..-..	
かん水方法 施用N濃度		○		○		◎					■	
	3号		4~4.5号		6号							
	手かん水	→	手かん水	→	底面ひも給水	→						
	30~50ppm	→			30~40ppm	→	50~100ppm	→				
エブアンドフ ロー5号鉢											..	
		○		○		◎					■	
	3号		5号									
	手かん水	→	手かん水	→	エブアンドフロー	→						
	30~40ppm	→		50~60ppm	→	40ppm	→	80~100ppm	→			

(..は種 ○鉢上げ ◎定植 ■ 出荷)

## 13-2 ミニシクラメン *Cyclamen persicum* サクラソウ科シクラメン属

## 栽培上の留意点

- 1) 栽培温度は普通種よりも5~6°C低くし、施肥量も少なくする。
  - 2) 葉数、開花数の多いものを生産するためには年内に播種し、葉組み回数をやや多くする。



月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作型	3.5号鉢	..		○		◎						
				2.5号		3.5号						

( $\therefore$ は種 ○鉢上げ ○鉢替え ◆加温 ◇保温 ★遮光 ■出荷)

## 品種

メティス、リブレット、カント、スーパーファイン、スーパー・マイクロ、ドレッシー、ミドリ、ミラクル、ミニビクトリアなど

播種準備

培養土は気相率が高く、肥料分の少ないものを使用する。市販の調整ピートなどが簡便である。自家製培養土を使う場合は消毒をする。播種前に培養土に十分かん水しておく。種子は消毒後、一晩水に浸漬する。

播種

1月～2月に播種する。仕上げ鉢サイズが3号以下の場合は、3月中旬までに播種する。200～288穴セルトレイまたは播種箱に播種する。播種後は種子が隠れる程度に覆土をし、20℃程度で管理する。

播種後の管理

普通種の項参照。子葉が完全に展開したら、窒素濃度30ppmの液肥を適宜追肥する。

鉢上げ

4月下旬頃、本葉3枚前後になったら2.5号鉢に鉢上げをする。その際、子葉の展開が不良なものや変形しているもの、生育の著しく不良な株は除く。培養土はシクラメンに準ずる。

良定植

7月3.5号鉢に定植する。培養土は鉢上げに準ずる。元肥には鉢上げよりも肥効の長い緩効性肥料を1~2g施用する。

九

鉢上げ後4月～6月は液肥窒素濃度30～50ppm、定植後7月～9月中旬は30ppm、9月中旬以後は50～60ppmを日常に追肥を行う。

四

二・七三 いは淮が子

## シクラ ミの仕の修理

薬剤による筋肉弛緩には2通りあります。温湿度管理をはじめとする環境管理

三

### 二、左三、いの五に淮、ばく

シク

出荷 開花数7-8輪以上で出荷する。土耕系より垦田に出荷を始める。

## 14 シネラリア(サイネリア)

*Senecio × hibridus(Willd.) Regel* キク科

### 栽培上の留意点

- 1) 系統、品種によって最適作型があり、は種期も違うので選択をあやまらないようにする。
- 2) 低温短日によって花芽分化する。花芽分化に必要な低温は5~10°Cで、約6週間この低温に遭遇する必要がある。



作型 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
4~5号鉢仕立 11~12月出荷							..	▼	▽		■	
1~2月出荷	■						..	▼	▽			
3~4月出荷	◆	~	◆				遮光	◆	~	◆		

(..は種 ▼鉢上げ ▽鉢替え ◆加温 ■出荷)

**収量目標** 850鉢 (5号) /a

**品種** プラネット, ビューティスピーリング, カーニバル, ダルマ系

**播種** 種子は2,000粒/mlと細かいので箱まきとし、購入用土等を利用し箱あたり約500粒をうすくまき覆土はしない。腰水かん水をし、新聞紙をかけ遮光し、発芽適温15~20°Cなのでなるべく涼しいところで管理する。発芽揃い後は新聞紙を除去する。

**移植** 1週間位で発芽する。は種後1ヶ月位で本葉2~3枚になるので3号ポットに上げる。(苗が小さい場合は、3号ポットに上げる前に200穴セルトレイに1回上げると管理しやすい。) 培養土は赤土:ピートモス:もみがら牛糞=5:4:1に混合し、pH6前後に調整したものを使用する。遮光、換気で涼しくし、着生後は少しづつ光線にならす。

**定植** 移植1ヶ月で本葉5~6枚になったら定植する。培養土は移植と同じ。

**かん水** 徒長と萎れに気をつけてかん水する。夜間、鉢土の表面が乾燥するように管理すると徒長しない。葉に水がかかると灰色かび病や褐斑病の発生原因となるので、丁寧にかん水する。

**施肥** 多肥を好み、肥料ぎれすると葉色が黄化する。窒素過多は開花が遅れる。20日間隔で少量ずつ化成肥料か7~10日間隔で窒素濃度50ppm位の液肥を施す。蕾がみえたら追肥は行わない。

**温度管理** 10月以降日中10°C前後、夜間6~7°Cを保つように管理する。

出荷時期に応じて温度を下げて管理する場合もある。

品質を左右するので、生育に応じて行いできるだけ通気性の良い環境で管理する。

**病害虫** 糸状菌病: うどんこ病 輪斑病 褐斑病 灰色かび病 立枯病

**調製・出荷** 4~5輪咲き始めたときが出荷適期である。葉色が落ちる場合は液肥を施す。

## 15 シャコバサボテン *Schlumbergera truncata* サボテン科シュルンベルゲラ属



### 栽培上の留意点

- 1) さし芽から開花期までの期間を十分にとり、茎節数を確保し、放射型の草姿を作る。
- 2) 夏期の強光による葉焼け防止の遮光を行なう。
- 3) 短日処理を行なう場合、処理前は肥料を切れるようにし、処理時はかん水量を少なくして、生育を抑え、花芽形成を促す。

作型 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
普通栽培 4号鉢仕立て												↓ —————
				(		遮光		)				▽ ————— × ————— [ ]
山上げ早出し 栽培 5~6号鉢 仕立て			↓ —————	(		遮光		)				▽ ————— × ————— ( 山上げ ) [ ]

(↓さし芽 ▽鉢上げ ×摘芯 [ ]出荷)

### 品種

デンマークカクタス系

エバ（桃）、ザライカ（赤）、ホワイトベル（白）、マドンガ（ワイン）、ゴールドチャーム（黄）、スーパークリー（赤橙）、ブリッター（白）、マナムスメ（桃）、ダークマリー（赤）、サンープライト（橙）、マルスカ（赤）、パステルアイ（薄桃）など

### 育苗

さし芽で繁殖を行なう。10~12月頃、親株の整枝・剪定を行なう時、親株2~3節残して切り取った茎節を1~2節に調製しさし穂とする。さし穂は陰干しし、切り口を腐敗防止のために乾かし、連結ポット（25穴）にピート主体の培養土を入れ、8~10枚を重ねてさす。さし芽時の温度は15°C以上とし、60%位に遮光する。

さしてから発根まではかん水は控え、乾燥気味に管理する。約1ヶ月で発根するので、ピートモス4、バーミキューライト3に炭、発泡スチロール等を混合した育苗培養土に鉢上げする。育苗培養土は、排水を重視し pH 6.0, EC 0.3~0.5 dS/mに調整する。

さしてから2ヶ月後を目安に、有機質の液肥を2週間おきに与える。

### 鉢上げ

3~5月上旬、ピートモス4、腐葉土2、バーミキューライト2に、炭、発泡スチロール、ベラボン等を混合した培養土に鉢上げする。

鉢上げ前後に、5号鉢は2段、7号鉢以上の大鉢は3段に苗をピンチし、草姿を整える。

### 開花調節

花芽分化には昼温20°C、夜温15°C以下、11~12時間以下の短日条件が必要であり、自然状態では9月下旬より花芽分化し、11月下旬~12月に開花する。

<短日処理>それ以前に開花させるためには、シルバーポリ等により日長を8時間位にするた

め、午後5時から翌朝8時すぎまでシェードを行い、室内を5ルクス以下にする。この場合、夜温が25°C以上になると短日処理を行なっても花芽分化が難しいため、平地では8月下旬が処理開始の限度である。短日処理は、25~30日間行い、蕾が米粒程度の大きさになつたら終了する。

<山上げ>高温を回避し、花芽分化を確実にするためには7月中旬頃から山上げし、短日処理を行なつて花芽を分化させる。25日間位の短日処理で確実に花芽分化するが、直ちに山から下ろすと平地の高温で花飛びが発生するので、それを防ぐために、蕾が小豆大になるまで養生する。

### **先端茎節の摘除**

花芽をつけさせるには、先端茎節を十分に充実させる必要がある。しかし、すべての先端茎節をこの状態に揃えるのは難しいので、短日処理を開始する前に、着蕾しにくい未熟な先端茎節を摘除する。この作業は、鉢全体の草姿のバランスを整えることも兼ねる。

### **施肥とかん水**

栄養状態が良すぎると着蕾が悪くなることから、花芽分化開始2ヶ月前まで（自然開花でも6月中旬）には最終施肥を終了する。花芽分化期前約1ヶ月前からかん水量を減らし、着蕾を促す。

着蕾後は、肥料切れによる落蕾を防止するのと、葉色を回復させるために、液肥等の速効性肥料を与える。

### **植物成長調整剤**

短日処理開始5~10日後に植物成長調整剤を散布すると、着蕾と開花促進に有効である。しかし、散布時期や濃度を誤ると、新芽を着生させる場合もあるので注意が必要である。

### **その他の管理**

直射日光に弱いので生育期間中は60%程度の遮光を行なう。遮光時期は3~10月で、遮光時間は時期によって光の強さが異なるために変える。

5月以降は急速に生育が進み、1ヶ月半で1節の茎節が熟す。花芽分化開始までには4節位は確保する。冬期も生育量を確保するため15°C以上で管理するのが理想である。

### **病害虫**

糸状菌病：茎枯病 炭疽病 痢病 灰色かび病 腐敗病 すそ腐病 茎腐病

### **出 荷**

蕾の大きさ0.5~1.5cm頃、十分に着色してから出荷する。高温では落花しやすいので、9月20日以降が理想である。

## 16 シャクナゲ *Rhododendron* ツツジ科ツツジ属

### 栽培上の留意点

- 1) 土壌の化学性や物理性等を考慮し、比較的栽培しやすい品種を選定する。



月 作型 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
5号鉢 仕立て										↓ — ↓		

(↓挿し木 ○移植 ◎定植 ×摘心 ▽鉢上げ ■出荷)

### 品 種

桜狩、ハイドンハンター、バルカン、プレジデント・ルーズベルト、夢路

### 挿し木

時期は本年枝が成熟する10~11月が適期である。

挿し穂は本年枝の頂芽を長さ10cm前後に切り、葉先を切り落とす。切り口に発根剤をつけて挿す。挿し床は電熱線などを用いて18~20°C程度に加温する。

挿し床はピート4:鹿沼土3:パーライト3の混合培養土を用いる。挿し木後、さし床にはビニルトンネルをかぶせ、気温と湿度を保つ。トンネル内の気温は20°Cを目標とする。

### 鉢上げ

4月に3号鉢に鉢上げ、6月に6~7号鉢に鉢替えする。培養土は挿し床用と同様とする。雨に当たないようハウス内で管理を行う(雨にあたると病気が多発する)。

### その後の管理

施肥は緩効性の化成肥料を年2回(3月と9月頃)置肥する。また、必要に応じてわい化剤を施用する。5月下旬から6月中旬にかけて第1回目の処理をし、3~4週間後に2回目の処理を行う。4月から10月上旬は50%程度の遮光を行う。

### せん定

さし木をした翌年の10~11月に、次年度の育苗用挿し穂の採取をかねてせん定を行う。せん定によって分枝が促進され、枝数の多い形のよい樹形を作ることができる。

### 開花調節

西洋シャクナゲは4~5月開花となるが、加温により開花調節が可能である。

### 病害虫

糸状菌病：根腐病 炭疽病 葉斑病 ペスタロチア病 芽枯病

害虫：カイガラムシ類 ハマキガ類 ソボリンゴカミキリ ゴマフボクトウ  
ツツジグンバイ

### 調製・出荷

花が2~3輪開いた頃出荷する。

## 17 スпатィフィラム

*Spathiphyllum clevelandii* サトイモ科スпатィフィラム属

### 栽培上の留意点

- 1) 温度と光線が生育開花を決定し、特に20°Cの高夜温では開花数が増加する。
- 2) 高湿度条件で、生育旺盛となり、乾燥すると葉の展開が悪くなるので注意する。
- 3) 根はあまり強くないので、鉢上げ後は根が動くまで過湿にしない。



月 作型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
6号鉢												

(.:は種 ▽鉢上げ ◎定植 ◆加温 ☆電照 ■出荷)

収量目標 6号鉢 750鉢/a

### 品 種

メリー（小～中輪）、ホワイトレディー（中～大輪）、マウナロア（中～大輪）

### 育 苗

購入苗を使用する。メリクロン苗の場合には、順化を行ってから3～3.5号鉢を用い、鉢上げし育苗する（実生、株分けでの繁殖も可能であるが、育苗期間が長期にわたり、施設占有期間が長くなってしまう）。

### 鉢上げ

仕上げ鉢には出荷予定の8～10ヶ月前に上げる。根はあまり強くないので鉢上げ後は根が十分に動くまで鉢土を過湿にしない。培養土は赤土5：ピート3：堆肥3の割合で混合し、消毒したものを用いる。pH（KC1）は5.5～6.0に調節する。

### 堆 肥

多肥栽培にも耐えうる植物である。培養土には緩効性化成肥料（10-10-10）1g/リットルを入れ、活着後に同じ化成肥料を1鉢当たり2～3gを施用する。また、生育状態、株の状態を見ながら液肥で追肥を行う。肥料を切らすと葉色が元に戻らなくなるので注意する。

### かん水

かん水は初期は葉水かん水を行い、乾かさないように特に注意する。葉についた水が乾くと葉に汚れが目立つので、栽培後半は底面給水がよい。

### 温度管理

低温には強い植物であるが、冬は最低15°C以上に保つ。それ以下では生育が遅れ、花立ちも悪くなる。また、夏は30°C以下を目指して、通風を図りできるだけ涼しい条件で栽培する。

### 遮 光

季節によって遮光程度を変える。光線が強いほど花数、分かつ、葉数も多くなるが、3万ルクス以上では葉やけが生じる。暗いと徒長し、花上がりも悪くなるので1～2万ルクス程度が

適当である。

### 開花促進

開花数の増加と開花促進を図るため、出荷予定の2.5～4ヶ月前に植物成長調整剤の茎葉処理を1回行う。小さな株に散布すると花苞が小さくなり商品価値を落とすので十分に生育した成熟株に処理する。また、栽培温度によって調整剤処理から開花までの日数に差があり、最低20℃以上で約2ヶ月、10℃では4～5ヶ月かかる。夜温が25℃以上になると花芽分化が抑制されるので注意する。

### 病害虫

細菌病：葉腐細菌病

糸状菌病：灰色かび病

害虫：ナメクジ、ハダニ類

### 出 荷

周年出荷が可能である。葉の上まで花か蕾が3本以上あり、鉢とのバランスがとれていれば出荷する。

18 ゼラニウム *Pelargonium x fortorum* フウロソウ科ペラルゴニウム属

## 栽培上の留意点

- 1) 種子の寿命が短いので、必要量を購入し直ちに播種する。
  - 2) 実生系は、温度変化が大きいほど発芽が遅れるので、適温(16~22℃)と適湿を保つ。播種後、100日程度で出荷できる。
  - 3) 栄養系は、挿し芽で増殖する。挿し穂は、木質化していない比較的若いものを選ぶ。



## 品 種

F<sub>1</sub>（リンゴ、ピント、マルチブルーム、ビデオシリーズ等）、オービックシリーズ等

繁殖

は種：発芽適温は16~22°Cで、適温で管理すると約10日で発芽する。発芽期間中はなるべく温度を保つことが発芽を揃えるポイントである。培養土は、市販のメトロミックス、ミックスピート等なるべく軽い物を使用する。発芽したら徐々に光線にあてる。

さし芽：さし芽の適温は15~25°Cで、時期は春から初夏、秋が適する。夏の高温時にさし芽する場合は、日陰で2~3日切り口を乾かしてから挿すと腐敗を防止できる。さし穂は、本葉3~4枚付け、さし芽後は十分かん水し、その後は控える。また、挿し芽後は遮光して、半日陰に置き、発根後に充分光線をあてる。培養土には、鹿沼土、川砂、パーライト等で病原菌のない物を使用する。

## 鉢上げ

実生苗は、本葉が2~3枚のとき、さし芽の場合はさし芽後25~30日に、2.5~3号鉢に鉢上げする。鉢上げ後は、十分かん水するとともに、適温で管理し、発根・生育を促す。培養土は、腐葉土4:田土4:赤土1:ピート1の割合で混合する。培養土は、十分に消毒する。

## 施肥

播種、約3週間後と、移植1週間前に施す。鉢上げ後は、かん水を兼ねて液肥を7~10日に1回程度施す。

## 仕上げ

本葉5~6枚頃、5号鉢に上げる。

温度管理

生育適温は15~16°C、冬季も十分温度を保って生育させる。

## 病害虫

細菌病：青枯病，斑葉細菌病

糸状菌病：茎腐病，さび病，褐斑病，根朽病，円星病，炭疽病，灰色かび病，立枯病  
黒根病斑点病，葉枯病

出荷

落花防止剤を処理する。1回目は花房の花弁の色が見え始めた頃、花房を中心に株全体に、2回目は出荷1週間前とし、開花している花房を避け、花房した蕾に向け散布する。散布前1日間はかん水せずに、夕方が曇天時に散布処理をする。

## 19 セントポーリア

*Saintpaulia ionantha* イワタバコ科セントポーリア属



### 栽培上の留意点

- 1) ハウス内の温度、湿度を適正にし、光線量を 7,000~8,000 ルクスとする。
- 2) 葉焼けを起こすので、冷水を直接葉にかん水しない。
- 3) 品種が多いので、市場動向に見合う品種導入を図る。

作型 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
5~7月出荷 (3.5号鉢)					■			↓	—	○	—	—
3~5月出荷			■			↓	—	○	—	—	—	—

(↓さし木 ○移植 ■出荷)

**出荷目標** 3.5号鉢 2,250鉢/a

**品種** 出荷時期の配色を考慮し、品種構成を考える。

### 葉挿し

温度、湿度、遮光、冷房等の確保ができれば1年中葉挿し、周年出荷できる。葉挿しは、出荷10ヵ月前に行う。葉柄を2~3cm付けて切り口を切り戻し、深さ1.5cmに育苗箱に挿す。外側の葉より中間の葉が発芽率が高い。

培養土は、ピートモスと発砲スチロールの割合が7:3で混合する。

### 株分け・移植

葉挿し後4ヵ月位で本葉3枚、葉の大きさが2~3cmになったら株分け、育苗箱に60~70本移植する。最低夜温18°Cを目標に管理する。培養土は挿し床用土と同じ。

### 鉢上げ

移植後、50~60日位で本葉6~7枚となったら3.5号鉢に鉢上げする。培養土は挿し床用土と同じ。

### 遮光

栽培に適している光は、7,000~8,000ルクスである。10,000ルクスを越えると葉焼けを起こすので注意する。

### かん水

冷水を葉にかけると葉を痛める（葉焼け症状）ので水温25°C位にする。

### 施肥

肥料は発根したら液肥（20-20-20）の2,000倍液を2~3週間後から月に1~2回与える。リン酸質肥料が欠乏すると生育不良となる。

### 温度管理

生育適温は20~25°Cで、15°C以下にはしないこと。夏季の高温時は遮光などでできる限り温度を下げるか、または冷房する。15°C以下では、株が硬くなり花芽分化しない。

空中湿度60%，遮光50%の管理が適する。

### 病害虫

糸状菌病：疫病 うどんこ病 褐斑病

害虫：ホコリダニ

### 調製・出荷

品種名のラベルを付け、配色を吟味しフラコントレイまたは専用ダンボール箱に並べて出荷する。葉が硬く折れやすいので、荷痛みしないように注意する。

## 20 ディffenbachia spp

サトイモ科ディffenbachia属

### 栽培上の留意点

- 1) 商品性は鮮明な葉の模様と草姿にある。特に緑色に深みがあれば斑が生きてくる。
- 2) ウィルスに罹病していない株を親株とし、さし穂を探る。ナイフは消毒しながら使用する。



月 作型 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
4～5号鉢					■			↓	~~~	↓		
6号鉢				■			↓	~~~	↓		▼	
7号鉢					■		↓	~~~	↓		▼	

(↓さし芽 ▼鉢替え ■出荷)

**品種** カミーラ, アンナ, カテリーナ, コンパクタ, グリーンマジック  
**さし木**

斑が鮮明で、分枝数の多い株を親株とし、若い分枝を上位3～4枚付けてナイフで切り取る（先端から10～15cmほどで採穂）。切り口から出る汁液を十分に洗い流してからさし木する。病害予防にさし穂を消毒しておく。  
親株を早い時期に摘心しておけば、分枝数が増える。

### 用土と管理

さし芽用土は、鉢上げ用の培養土と同じで、ピートモス主体がよい。例えば、ピートモス7, 土1, バーク1, くん炭+パーライト1など。ただし、自家配合培養土の種類によっては蒸気消毒等を行う。

2.5～6号鉢に培養土を入れ十分にかん水した後、直ざしする。発根するまではかん水を控える。温度は20℃以上必要（約20日で発根・活着）で、25℃あれば発根がよく揃う。

### 温度管理

冬は少なくとも18℃以上、できれば20℃を保つように加温する。

### 遮光

葉焼けを防ぐため、夏は70%，冬は40～50%遮光する。

### かん水

夏は毎日または隔日にたっぷりとかん水し、冬は週1～2回程度少なめにかん水する。

### 施肥

直ざし後、1ヵ月半位経過したら、緩効性肥料を鉢の大きさに応じて置肥する。生育状況を見て、薄い液肥をかん水代わりに施す。

### 病害虫

細菌病：葉腐細菌病

糸状菌病：炭疽病

害虫：ハダニ類、アブラムシ類、ヨトウムシ類、アザミウマ類

### 出荷

4～9月の出荷を主とする。葉色が黄緑色となり、ボリューム感が備わったバランスのよいものから出荷する。なお、出荷前の適正な鉢の収容量は、3.3m<sup>2</sup>当たり4号鉢で60鉢程度である。

## 21 ドラセナ・デレメンシス *Dracaena deremensis* リュウゼツラン科 ドラセナ属

### 栽培上の留意点

- 1) 株元に細根が少なく、移植時の断根により生育力回復に時間がかかるので移植に注意する。
- 2) 移植直後は十分にかん水し、その後は乾いたらかん水する。過湿になると根腐れをおこしやすい。



作型	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
4~5号鉢 仕立て					↓	▽	○	○					

(↓さし芽 ▽鉢上げ ◎定植 ▼鉢替え ◆保温 ◇保温 ◑出荷)

### 品種 さし木

天ざしは8節以上をつけ、発根部に水ごけを包むようにする。茎ざしは天ざしに用いた株を2~3節に切ってさすか、横にして茎伏せにする。培養土はピートモス8、バーミキュライト2で混合したものを用いる。20°Cの温度が確保できれば、1~2ヶ月で発根する。温度が不足する場合は、ビニールフィルムで覆い発根を促す。

### 鉢上げ

発根後、苗の老化を防ぐため、根を切らないように早めに植える。鉢上げは3号鉢に、発根際から2cm程度の深さに植える。仕上げ鉢への定植は、4~5号鉢に1~3株植える。培養土は赤土6、ピートモス2、腐葉土2の割合で混合したものを用いる。

### 施肥

鉢上げ後、下部の活着確認後に生育状況を見ながら、緩効性粒状化成肥料を2~3ヶ月間隔で施用する。

### 温度管理

耐寒性のある植物であるが、営利栽培としては最低15°Cを保つようとする。夏場は20~30%の遮光を行う。

### 親株管理

さし木後、短期間で成品に仕上げ、施設の回転率を上げるために、さし穂は重要である。草姿の良い穂を取るために、鉢栽培より地植え栽培の方が優る。鉢栽培は、棚下利用が可能だが、母株としての老化が早い。

### 病害虫

害虫：アブラムシ類 ハダニ類 ワタカイガラムシ

### 出荷

厳冬期を除き、周年出荷は可能であるが、需要の中心は3~6月である。鉢とのバランスが良いもので、病気がなく枯れ葉を除去したものを出荷する。商品化の様式としてはミニから大鉢まで可能である。

## 22 ニューギニア・インパチェンス

*Impatiens hawkeri W. Bull* ツリフネソウ科ツリフネソウ属

### 栽培上の留意点

- 1) 大半が栄養系の登録品種であり、輸入による契約栽培となる。
- 2) 需要期は春～初夏で、シクラメンの後作などとして導入される。



月 作型 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
鉢物用	—	▼	—	■	■	■	■	■	◇ ◇ ◇	◇ ◇ ◇ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆	▽ — ×	

(▽鉢上げ ▼鉢替え ×摘心 ◇保温 ◆加温 ■出荷)

### 品 種

ロココシリーズ、トロピカルシリーズ、サンハーモニーシリーズ、ハーモニーラディアンスシリーズなど

### 育苗・鉢替え

購入苗を3.5号ポットに鉢上げする。翌年2月に5号の仕上げ鉢へ鉢替え（定植）する。地温が13℃以下になると根の生長が悪くなるので、活着促進のため、鉢替えの際はあらかじめハウス内で培養土を暖めておくと良い。

### 施 肥

緩効性化成肥料（10-10-10）を培養土1リットル当たりに1~2g入れて鉢上げする。仕上げ鉢には同肥料を元肥に2~3g/鉢施用し、その後生育を見ながら400~600倍の液肥を月に2~3回施用する。肥料が切れると葉の光沢がなくなり、下葉が黄化、落葉するので注意する。

### 培養土

ピートモス4:赤土4:ペーライト2とする。pH5.5~6.0, EC1.0dS/m以下を目標とする。

### 摘 心

摘心は特に行わなくても良いが、行う場合は鉢上げ1か月後に先端部を浅く摘み取る。

### 栽培温度

比較的高温を好むので日中は25℃、最低気温16~18℃で管理する。植え付け後は活着を促すため、1~2週間は20℃以上を保つように管理する。

### かん水

鉢土の表面がやや乾いたら、十分にかん水する。冬期は冷水をかん水すると生育が悪くなるので、気温が高い時間帯に行う。

### 病害虫

糸状菌病：疫病 ※土壤水分が多いと発生が多い。

ハダニやホコリダニが発生しやすいので注意する。

### 調製・出荷

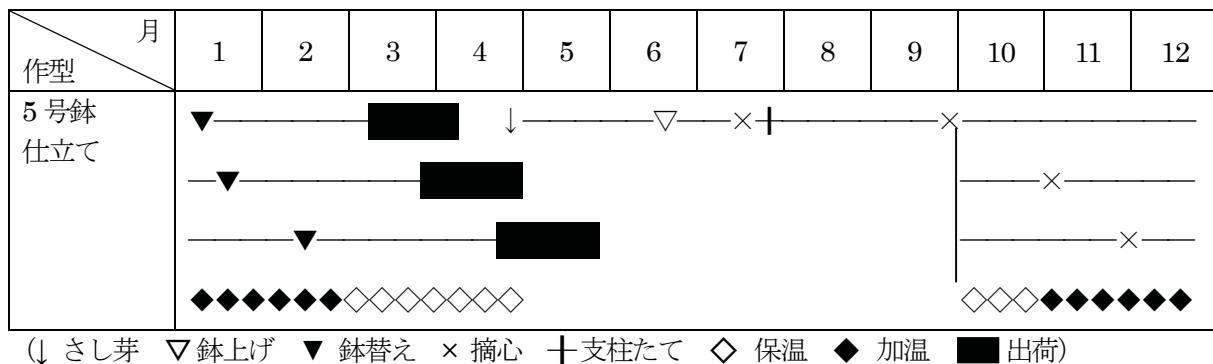
5号鉢で数輪開花したものを出荷する。草丈が大きく、茎葉が柔らかいので、輸送には細心の注意を要する。花色、葉色をうまく組み合わせて出荷すると市場性が高まる。

## 23 ノボタン, シコンノボタン

*Melastoma candidum* ノボタン科ノボタン属  
*Tibouchina urvilleana* ノボタン科シコンノボタン(ディボウキナ)属

### 栽培上の留意点

- 1) 鉢物として利用する場合草丈を抑え、枝数を多くし花数を確保する。
- 2) 加温し出荷期を早めることは可能だが、7月の花として施設利用を図る。



**品種** ノボタン, シコンノボタン

### 親株管理

6号鉢位に植え最低5°Cで越冬、2月以後15°Cに加温し側枝の数を確保する。

### さし木

天さし穂を7cmにとり、鹿沼土か赤玉土にさす。地温15~20°Cで約30~40日で発根する。  
さし木後は直射光を避ける。発根確認後は徒長させないような管理を行う。

### 鉢上げ

発根後4.5号鉢1本(2回摘心), 5号鉢3本(1回摘心)植えとする。培養土は赤玉土(小粒)  
又は田土5:腐葉土3:ピート2に混合。夜温10°C以上に保つ。

### 施肥

鉢上げ培養土には緩効性粒状化成肥料(N成分6~10%)等を少量混ぜ、追肥は緩効性化成肥料(10-10-10)で1~2g前後施用する。さらに生育を見て液肥を施す。

### 摘心・整枝

枝数を多くして花数を確保するため、活着後2~3節残し摘心を行う(2回目の摘心は1節残し)。  
シコンノボタンは節間が著しく徒長しやすいので注意する。

### かん水

鉢表面の土が乾いたらかん水するが、株の大きさができてきたら、花付きを良くするためかん水間隔をあける。

### 病害虫

オンシツコナジラミ

### 調製・出荷

花芽は18°Cの温度があれば常時分化する。

鮮明な花色を出すため、蕾が見え始めたら十分光線を当てる。蕾が紫色に色づけば出荷しても良い。

## 24 ハイドランジア

*Hydrangea macrophylla* ユキノシタ科アジサイ属

### 栽培上の留意点

- 花色の発現は用土のpHや、施肥によってコントロールする。
- 次年度の花芽は、7月下旬には既に分化しているため、8月以降の強剪定は避ける。



	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
6号鉢仕立て	◇◇◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆										◇◇◇◇	

(↓さし芽 ▽鉢上げ ×摘心 ▼鉢替え ◇保温 ◆加温 ■採花)

### 品種

ブルーダイヤモンド（青）、ミセスクミコ（桃）、ブルースカイ（がく・青）、スミダノハナビ（白）、城ヶ崎（ピンク）、オタフク（ピンク、青）、ムーン（ピンク、青）等

### 親株管理

採穂用の親株は、できるだけ早く花を摘み次年度に備える。8月以降の強剪定は、花芽も共に摘み取る危険性があるため注意する。鉢替えは2~3年毎に行う。屋外で親株を管理する場合、遅くまで窒素肥料が効いていると、組織が硬くならず霜害を受け花芽が飛びやすいため、9月までに施肥は終わらせる。

### さし芽

4月下旬~5月下旬（大鉢仕立てほど早く），天挿し又は1節挿しとなるように枝を切り、30分位水上げする。大葉は3分の1に切り、鹿沼土などを用土に育苗箱で3×4 cmにさす。密閉さしか、ミスト繁殖とし、寒冷紗で覆う。密閉さしの場合は発根を確認したら、すみやかにビニールを取り除いて過湿を防ぎ、少しづつ光に当てる。

### 仕上げと培養土調整

さし芽後40~45日後、3.5~4号ポリポットに上げる。培養土はこの段階から色別に調合し青系は、赤土又は鹿沼土：未調整ピートモス：牛ふん：腐葉土=4:4:1:1の割合でpH (KC1) 5.5以下にする。赤桃系は、赤土又は鹿沼土：牛ふん：腐葉土=5:2.5:2.5の割合で配合し酸性用土資材は避け、消石灰などを配合しpH6.5以上にする。鉢上げ培養土には、緩効性肥料を青系2g/リットル、赤系4g/リットルを目安に施用する。

### 摘心

7月下旬までに天挿し又は1節挿しとも1回、地上部2~3節を残して摘心する。わい性種は早めに、高性種は7月下旬までに行い、更に高性種は摘心10日後にわい化剤を処理する。最終摘心が遅れると花芽が形成されない。

### その後の管理

株の生育期間中、葉からの蒸散が多いのでこまめにかん水し、盛夏期は寒冷紗で遮光する。9月以降は株間をとり光線に良く当て枝の充実を図る。また、側枝が多く出た株は、余分な枝を整理する。11月以後強い霜で先端が枯れるので無加温温室へ移し、鉢替えまで十分な低温に当て休眠を打破させる（5°C以下で600時間以上の低温遭遇が必要）。

色ぼけしたものは、商品価値が下がってしまうので、鉢の間隔を広くとり、日中は通風、採光を図る。

### 鉢替え

1月中に6号鉢に鉢替えする。6号で6花房以上、5号で4花房以上となるよう、枝数を確保し更に開花時の花の配置を考えて植える。培養土の配合は鉢替時と同じ。

### 温度管理

鉢替え後は、最低5°C以下にならないよう注意し、加温する場合は、目標設定温度15~17°Cにする。

## 施 肥

青系はpH (KC 1) 4.0~5.0, 窒素は硝酸態窒素を用いて窒素, リン酸を控え目に, カリは多くして, 花蕾が100円玉の大きさになったら硫酸アルミニウムまたはミョウバンを水に溶いたものを2~3回かん注する。濃度は1000倍程度とする。赤系はpH (KC 1) 6.0~7.0, 窒素はアンモニア態窒素を用い, 窒素, リン酸は多くても良い。

## 病害虫

病害: うどんこ病 さび病 ペスタロチア病 すすかび病 葉斑病 炭疽病 葉腐病  
斑点病等

虫害: カイガラムシ類 アザミウマ類 ハバチ類

## 出 荷

花房が十分開き, 品種独特の色を出してから出荷する。

## 25 ハイビスカス *Hibiscus rosa-sinensis* アオイ科フヨウ属

### 栽培上の留意点

- 1) ボリュームのある草姿の品質評価が高い。
- 2) 肥料は多めがよく、品質の良いものができる。



月 作型 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
5号鉢仕立て		↓			▽							
			▼			■						
			▼	X	X	■						

(↓さし芽 ▽鉢上げ ▼鉢替え X摘心 ■出荷)

### 品種

中輪 赤：サマーレッド 黄：ハワイアンイエロー 赤黄：チボリー 赤白：日の丸  
大輪 八重：バルカン

### さし木

早期春・初夏・秋いずれも 20°C以上が必要である。さし穂は、当年枝の頂芽は 5 節、その株を 2~3 節に切り、切り口の粘液を良く洗い、ピート 3 : 鹿沼土の細粒 1 に挿す。発根まで遮光する。大輪種や黄、オレンジ系の発根はあまり良くない。セルトレイにさし木する方法が多い。

### 鉢上げ

さし木後、2か月くらいで 3~3.5 号鉢へ鉢上げする。培養土は、ピートモス 4 : パーライト 2 : バーミキュライト 2 : ゼオライト 2 の割合で、苗が鉢の中心に入るようとする。鉢上げ後は十分光線に当てる。

### 摘心

摘心によって 2~3 本揃った側枝を確保する。鉢上げ後 4~5 節で切りその後 1~2 回、月 1 回の割合で摘心、整枝を行う。

### 鉢替え

前回と同じ培養土で 5 号鉢に鉢替えする。

### 施肥

鉢上げ培養土に元肥としてマグアンプ K を 3g/リットル入れて、鉢上げ苗の活着後（直さしはさし木 2 か月後）置肥として 1B を 20 粒程度与え照りのある葉と株の充実を図る。

### 温度管理

最低夜温 15°C 以上、日中最高気温 30°C を目標に保温・加温を続ける。

### かん水

冬期は 1 週間毎、2 月以降は 3~4 日間隔でたっぷり施す。

### 植物成長調節剤

大量生産では、出荷期をある程度摘心時期で調整できるが、側枝が 5 cm くらい伸びて揃った頃にわい化剤処理（サイコセル）を行う。

### 病害虫

ハダニ類、アブラムシ類、コナジラミ類等

### 調製・出荷

最低 3 本の側枝につぼみが揃い、色づいた鉢から出荷する。

## 26 ヒメノボタン(メキシコノボタン)

*Heterocentron elegans* ノボタン科ヘテロケントロン(メキシコノボタン)属

### 栽培上の留意点

- 1) 根は耐肥性に欠けるので、追肥は液肥中心が安全である。
- 2) 鉢上げ時に活着を良くするため肥料を控えめにする。
- 3) 着花が不安定で、施肥法・温度（特に低温）管理等、勘に頼る部分が多い。



月 作型 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
5号鉢立て					↓	▽			×			

(↓さし芽 ▽鉢上げ ×摘心 ■出荷)

### 品種 従来種

#### 親株管理

出来上がったものから、必要株を残し親株とする。

#### さし芽

高温期（7～9月）を除きいつでもよい（5月下旬～6月上旬）。葉柄基部より発根するのを2節ざしとする。さし芽はセルトレイにさす。培養土は、赤土6:腐葉土2:ピートモス1:ペーライト1の割合で混合する。

#### 夏期管理

高温乾燥に弱いので、夏場は寒冷紗の被覆下で管理し、水切れに注意する。

#### 摘心

9月中旬頃摘心し、ポット全体に拡がるように株を作る。10月中旬に伸びすぎた枝を摘心する。

#### 鉢替え

1月中下旬に4～5号鉢に赤土6:腐葉土2:ピートモス1:ペーライト1の混合培養土で鉢替えする。

#### 施肥

液肥で800倍程度を施す。花芽分化を促すため11月上旬～2月中旬までは施肥しない。

#### 温度管理

年内は無加温で、凍らない程度に低温管理し、花芽分化を促進する。11月は3～5°C、2月は10°C、2月中旬から出荷までは15°Cを保つ。

#### 調製・出荷

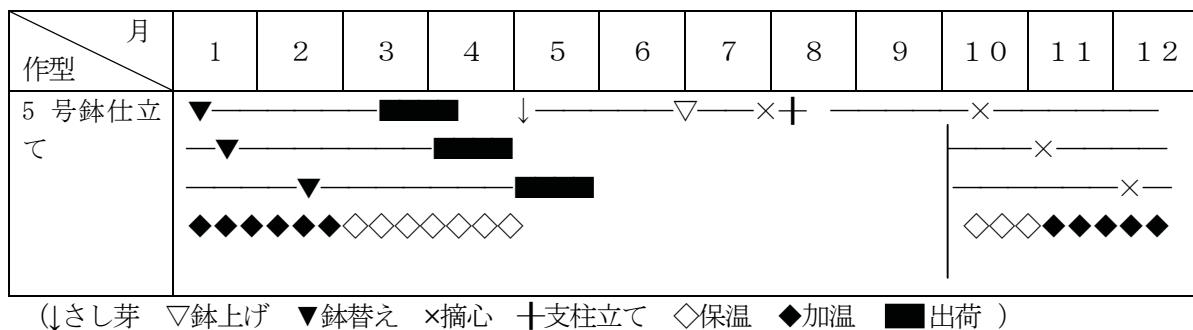
3月中旬～4月中旬、4～5号鉢で2～3輪開花したら出荷する。

## 27 ブーゲンビレア

*Bougainvillea* オシロイバナ科ブーゲンビレア属

### 栽培上の留意点

- 1) かん水と摘心により花芽分化および開花期を調節するが、株の栄養管理が前提となる。
- 2) 温暖長日条件下で旺盛な生育をするが、開花中の日照不足により落花するので注意する。
- 3) 特に日射量の多寡によって品質や花持ちが決まるので、栽培管理上留意する。



### 品種

一重咲き系：フレンドリー、クリスタルピンク、パープルロープ、ミセスバット

八重咲き系：ピンクシャンパン、ブライダルピンク

### さし木

側枝の発生が良く、低温性品種の選定が重要である。親株用には前年出荷時に花苞の色が鮮明で生育が旺盛なものを選別しておく。やや褐色気味の太い枝を使用し、先端の柔らかい部分や株元の堅い部分は使用しない。2節ごとに切り、葉を1枚残し3時間程水上げし、川砂単用又は川砂6:ピートモス4の混合培養土に3cm角、深さ4cm位にさし、十分かん水する。ミストさしが最適であるが、黒寒冷紗で覆い、こまめに散水を行って湿度を保つ。さし木床は20°C以上を確保する。

### 鉢上げ

さし木約50日後に赤土6:腐葉3:砂1を混合した培養土を用い、折れやすい根に注意して3~5号鉢に鉢上げする。

### 施肥

活着の具合を見て、緩効性粒状化成肥料(10-10-10)を1鉢当たり3~4g施用し、その後も葉色を見ながら肥切れしないように適宜追肥を行う。

### 支柱立て

鉢上げ後30~40cmで摘心し、10番鉄線を支柱とし、クイックタイで2~3箇所固定する。地際から発生するシートは切除し、柱状仕立てとする。

### 摘心

その後伸びてきた新梢を摘心し整枝するが、摘心時期は出荷期を考慮して決定する。

最終ピンチは3月出荷で10月中旬、4月出荷で11月中旬、5月出荷で12月中旬、6月出荷では1月中旬が目安である。

### かん水

春~秋季は毎日1回、冬季は1週間に2回程度を目安にかん水する。ブーゲンビレアは土壤の

乾燥によって花芽が着きやすくなるため、乾燥処理によって開花調節を行う。最終摘心の1週間前からかん水を抑制し、摘心をはさんで合わせて3週間、新梢が萎れはじめる程度にまでかん水を控える。

#### **その他の管理**

最低夜温は16°C以上とするが、温度確保のための多重被覆のやり過ぎは光線不足となるので注意し、光を十分当てるために株間隔も広げる。

#### **鉢替え**

1~2月、前回と同じ培養土で4.5~5号の深鉢へ鉢替えする。

#### **調製・出荷**

落花防止のため一重種は出荷2週間前と2~3日前の2回、STSなどを散布する。ガラスハウスでの栽培では、花色を良くするために充分な光線が必要で、出荷前に温度条件が合えば、屋外で馴らして出荷すると良い。出荷期は3~6月が一般的である。

## 28 フィカス・ベンジャミナ *Ficus benjamina* クワ科フィクス属



## 栽培上の留意点

- 1) 標準、スタンド型等があるが、鉢サイズ、仕立て方など独創性が商品を決める。
  - 2) 肥料切れなど株を老化させると実が付き、生育力がさらに弱くなる。

**品種** ヌダ, エキゾチカ, ゴールドラッシュ, 斑入りベンジャミナ  
**さし木**

充実した枝の頂芽が最もさし木に適しているが、3枚ほど葉を付けた管ざしでもよい。地温が15℃以上あれば周年でさすことができる。頂芽ざしなら10cm位切り返し後、切り口から出る汁液を十分洗い、切り口に発根剤を付け、鹿沼土6：ピートモス4の混合培養土にさす。夏季にさす場合は、50%の遮光を行う。夏季では約15日、冬季なら40～50日で発根する。

鉢上げ

赤土4:腐葉土4:ピートモス2を混合した培養土を用いて3.5号ポットに上げる。このとき、鉢の中心ではなく、側面に苗を植え付けると寄せ植え時にきれいに仕上がる。

什上げ鉢替え

翌年4月から6月に順次鉢替えを行う。赤土5:腐葉土3:ピートモス2の割合で混合した培養土を用い、最終仕立て法を考え1~4本を4~8号鉢に植え替え、活着後戸外へ出す。植え替え時、2本以上の仕立てでは、背丈を揃えるよりも幹の大きさを揃えるよう注意する。

施肥

鉢上げ苗は活着以後2ヶ月間隔で緩効性粒状肥料を鉢サイズに合わせて施す

鉢上

整枝は冬季45日、夏季30日でピンチし、その度に油かす、緩効性肥料を施す。小中鉢は4~5回、大鉢は6~7回、徒長する枝を中心に形を整えながらピンチを繰り返す。

仕立法では、自然形なら支柱を早めに立て、主幹が下垂しないよう早めに誘引する。スタンド仕立てなら、仕上げ時目標の高さより10~15cm下で天芽、主幹をピンチし、上位3~5木の枝の2~3葉を残し、主幹の全ての枝を切り落とす。三つ編みは、地際より工寮に行う

生育後半は充分光を当てる。鉢のバランス上、ボリューム不足の鉢はさらに大きな鉢へ上げ、秋または翌年の出芽用に養成を続ける。

秋よ  
温度管理

夜温15~25°C、昼温25~30°Cを目標に、11日から4日由旬頃まで加温する

## 由寒致

ハダニ類は要注意 カイガラトミ類は整枝後半に多くなる

山 草

最終整枝後 約1.5~2ヶ月で新葉が密に茂った状態になったら出荷する

## 29 ブライダルベール

*Gibasis geniculata* ツユクサ科ギバシス属

### 栽培上の留意点

- 排水のよい肥沃な用土を使い、生育期の鉢間隔をとり光をあてる。



月 作型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
5号つり鉢 仕立て											↓	—
	×	×										

(↓さし芽 ×摘心 ◆加温 ◇保温 ■出荷)

### 親株管理

光によく当て、乾燥気味に管理する。1~2回ピンチする。

### さし木

親株から剪定したものをさし穂とする。7~8本まとめて切り、そのまま仕上げ鉢に4~5カ所さす。さし木後は灌水を十分行い、光をしっかり当てる。培養土は赤玉土2.5、田土2.5、腐葉土5の割合で混ぜ、土壤消毒を行う。

### 施肥

さし木後10日目ぐらいに、発根を確認してから化成肥料(10-10-10)を2~3回、2~3g/鉢施用する。

### かん水

生育初期はやや控えめにする。低温期は2~3日間隔、4月以降は毎日かん水する。

### ピンチ

1回目はさし木後1.5~2カ月目に、鉢中央がやや高くなるようにピンチし、鉢を広げ、さらに1.5カ月後に形を整える程度に行う。

### 温度と光の管理

生育盛期の夜温は15°C以上とするが、それ以降は10°Cで十分である。5°Cくらいになると生育が遅れるので注意する。株ができてくると内部が蒸れやすくなるので、光を十分当て、換気に努める。

### 開花調節

出荷予定の1カ月前に、肥料が切れるように水切りを5日程度行う。この時点で肥料分が多く、葉色が濃いと開花しない。

### 出荷

3~6月が出荷期間である。株がボール状になり、花が全体に咲き始めた時が適期である。適期を逃すと根つまり、鉢内部の蒸れ、病害発生などが多くなる。

## 30-1 プリムラ・オブコニカ *Primula obconica* サクラソウ科プリムラ属

### 栽培上の留意点

- 1) プリムラ類は夏の高温に弱く、幼苗期や夏越し管理に注意する。
- 2) オブコニカの特徴として、光線が弱いと葉が黄ばみ、生育が劣り、発色不良となる。
- 3) 葉の毛から分泌されるプリミンによって肌がかぶれる人があるので注意する。プリミンフリーの品種もある。



作型	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
4~5号鉢 仕立て				∴	∴	▽	▽		▼		▼		■

(∴は種 ▽鉢上げ ▼鉢替え ◆加温 ■出荷)

### 品種

うつりべに、うつりむらさき、アプリコット、F<sub>1</sub> ジュノシリーズ、F<sub>1</sub> リブレ、タッチミー シリーズなど

### 繁殖・実生

3月下旬から4月下旬に行う。プロミックスなどの市販培養土を用いて箱播きする。1,000鉢当たり2mlの種子を用いて薄播きとする。好光性種子なので覆土しない。

### 鉢上げ・仮植

本葉2~3枚時に仮植する。活着までの数日は直射日光を避け、寒冷紗を被覆し、乾きすぎない範囲でかん水する。活着後、月1回の間隔で液肥を施す。高温では生育が抑えられクロロシスが出るので、生育適温15°Cにできるだけ近づけるよう、60~70%遮光して夏越しをする。

### 鉢替え・鉢上げ(定植)

9月~10月下旬に仕上げ鉢へ定植を行う。

培養土は赤土4、腐葉土3、バーク堆肥3の割合とし、ゴロ土を鉢底に入れる。pHは6.0を目標とする。

### 施肥

元肥として、培養土1リットル当たりにようりんまたは過石を2gと緩効性肥料を少量入れる。

追肥として、IB化成や液肥などを葉色を見ながら施す。

### その後の管理

生育が進むと花芽分化を始めるが、短日より長日で発達し開花が早い。

10月下旬まで無加温、11月以降は出荷期によって温度を変え、早出しでは最低13~15°C、2月以降の遅出しでは8~10°Cを保つ。

冬期に灰色かび病がでやすいので、朝に暖房機を回して結露をとることが重要である。

### 病害虫

細菌病：腐敗病 斑葉細菌病 葉枯病 軟腐病

糸状菌病：さび病 褐斑病 斑点病 灰色かび病

害虫：コナジラミ類 アザミウマ類

### 出荷

花茎3~4本開花した頃に出荷する。出荷前に緩効性肥料を追肥する。